校異源氏物語・てならひ

そのころよかはになにかしそうつとかいひていとたうとき人すみけりやそちあまりのはゝ五十はかりのいもうとありけりふるきくわんありてはつせにまうてたりけりむつましうやむことなくおもふてしのあさりをそへて仏経くやうすることをこなひけりことゝもおほくしてかへるみちにならさかといふ山こえける程よりこのはゝのあま君心ちあしうしけれはかくてはいかてかのこりのみちをもおはしつかむともてさはきてうちのわたりにしりたりける人のいゑありけるにとゝめてけふはかりやすめたてまつるになをいたうわつらへはよかはにせうそこしたり山こもりのほいふかくことしはいてしと思けれとかきりのさまなるおやのみちのそらにてなくやならむとおとろきていそき物し給へりおしむへくもあらぬ人さまを身つからもてしのなかにもけむあるしてかちしさはくをいゑあるしきゝてみたけさうしゝけるをいたうおい給へる人のをもくなやみ給ふはいかゝとうしろめたけに思いていひけれはさもいふへきことそいとおしう思ていとせはくむつかしうもあれはやう　くいてたてまつるへきになかゝみふたかりてれいすみ給方はいむへかりけれは故朱雀院の御両にてうちの院といひし所このわたりならむと思いてゝ院もりそうつしり給へりけれは一二日やとらんといひにやり給へりけれはゝつせになんきのふみなまいりにけるとていとあやしきやともりのおきなをよひてゐてきたりおはしまさはゝやいたつらなる院のしむ殿にこそ侍めれ物まうての人はつねにそやとり給といへはいとよかなりおほやけ所なれと人もなく心やすきをとてみせにやり給このおきな例もかくやとる人をみならひたりけれはおろそかなるしつらいなとしてきたりまつそうつわたり給いといたくあれておそろしけなる所かなとみ給大とこたち経よめなとの給このはつせにそひたりしあさりとおなしやうなるなにことのあるにかつき　くしきほとのけらうほうしにひともさせて人もよらぬうしろのかたにいきたりもりかとみゆる木の下をうとましけのわたりやとみいれたるにしろき物のひろこりたるそみゆるかれはなにそと立とまりてひをあかくなしてみれはものゝゐたるすかたなりきつねのへんくゑしたるにくしみあらはさむとてひとりは今すこしあゆみよるいまひとりはあなようなよからぬものならむといひてさやうの物

しりそくへきいんをつくりつゝさすかに猶まもるかしらのかみあらはふとりぬへき心ちするに此ひともしたる大とこはゝかりもなくあふなきさまにてちかくよりてそのさまをみれはかみはなかくつや　くとしておほきなる木のいとあら　くしきによりゐていみしうなくめつらしきことにも侍かなそうつの御坊に御らむせさせたてまつらはやといへはけにあやしきことなりとて一人はまうてゝかゝる事なむと申すきつねの人にへんくゑするとはむかしよりきけとまたみぬもの也とてわさとおりておはすかのわたり給はんとする事によりてけすともみなはか　くしきはみつし所なとあるへかしきことゝもをかゝるわたりにはいそく物なりけれはゐしつまりなとしたるにたゝ四五人してこゝなる物をみるにかはることもなしあやしうて時のうつるまてみるとく夜もあけはてなん人かなにそとみあらはさむと心にさるへきしんこむをよみいんをつくりて心みるにしるくや思らんこれは人なりさらにひさうのけしからぬ物にあらすよりてとへなくなりたる人にはあらぬにこそあめれもしゝにたりける人をすてたりけるかよみかへりたるかといふなにのさる人をかこの院のうちにすて侍らむたとひまことに人なりともきつねこたまやうの物のあさむきてとりもてきたるにこそ侍らめとふひんにも侍けるかなけからひあるへき所にこそ侍へめれといひてありつるやともりのをのこをよふ山ひこのこたふるもいとおそろしあやしのさまにひたいおしあけていてきたりこゝにはわかき女なとやすみ給かゝることなんあるとてみすれはきつねのつかうまつるなりこの木のもとになん時ゝあやしきわさなむし侍をとゝしの秋もこゝに侍人のこの二はかりにはへしをとりてまうてきたりしかとみをとろかすはへりきさて其ちこはしにやしにしといへはいきて侍りきつねはさこそは人をゝひやかせとことにもあらぬやつといふさまいとなれたりかのよふかきまいりものゝ所に心をよせたるなるへしそうつさらはさやうの物のしたるわさか猶よくみよとて此ものをちせぬ法しをよせたれはおにか神かきつねかこたまかゝはかりのあめのしたのけんさのおはしますにはえかくれたてまつらしなのり給へ　くときぬをとりてひけはかほをひきいれていよ　くなくいてあなさかなのこたまのおにやまさにかくれなんやといひつゝかほをみんとするに昔ありけむめもはなもなかりけるめおにゝやあらんとむくつけきをたのもしういかきさまを人にみせむと思てきぬをひきぬかせんとすれはうつふしてこゑたつはかりなくなにゝまれかくあやしきことなへて世にあらしとてみはてんと思に雨いたくふりぬへしかくてをいたらはしにはて侍ぬへしかきのもとにこそいたさめといふそうつまことの人のかたちなりその命たえぬをみる　く

すてんこといといみしきことなり池にをよくいを山になくしかをたに人にとら
へられてしなむとするをみてたすけさらむはいとかなしかるへし人の命ひさし
かるましき物なれとのこりの命一二日をもおしますはあるへからすおにゝもか
みにもりようせられ人にをはれ人にははかりこたれてもこれよこさまのしにをす
へき物にこそあんめれ仏のかならすゝくひ給へきゝはなりなを心みにしはしゆ
をのませなとしてたすけ心みむつゐにしなはいふかきりにあらすとの給てこの
大とこしていたきいれさせ給ふをてしともたい　くしきわさかないたうわつら
ひ給人の御あたりによからぬ物をとりいれてけからひかならすいてきなんとす
ともとくもあり又物のへんくゑにもあれめにみす　くいける人をかゝるあめに
うちうしなはせんはいみしきことなれはなと心　くにいふ下すなとはいとさは
かしく物をうたていひなす物なれは人さはかしからぬかくれのかたになんふせ
たりける御車よせており給程いたうくるしかり給とてのゝしるすこしゝつまり
てそうつありつる人いかゝなりぬるとゝひ給なよ　くとして物いはすいきもし
侍らすなにか物にけとられにける人にこそといふをいもうとのあま君きゝ給て
何事そとゝふしか　くのことなむ六十にあまるとしめつらかなる物をみ給へつ
るとの給うちきくまゝにをのかてらにてみし夢ありきいかやうなる人そまつそ
のさまみんとなきての給たゝこのひむかしのやりとになん侍はや御覧せよとい
へはいそきゆきてみるに人もよりつかてそすておきたりけるいとわかうゝつく
しけなる女のしろきあやのきぬひとかさねくれなひのはかまそきたるかはいみ
しうかうはしくてあてなるけはひかきりなしたゝ我恋かなしむゝすめのかへり
おはしたるなめりとてなく　くこたちをいたしていたきいれさすいかなりつら
むともありさまみぬ人はおそろしからていたきいれついけるやうにもあらてさ
すかにめをほのかにみあけたるに物のたまへやいかなる人かゝくては物し給へ
るといへともものおほえぬさま也ゆとりてゝつからすくひいれなとするにたゝよ
はりにたえいるやうなりけれは中　くいみしきわさかなとてこの人なくなりぬ
へしかちし給へとけんさのあさりにいふされはこそあやしき御ものあつかひと
はいへとかみなとのために経よみつゝいのるそうつもさしのそきていかにそな
にのしわさそとよくてうしてとへとの給へといとよはけにきえもていくやうな
れはえいき侍らしすそろなるけからひにこもりてわつらふへきことさすかにい
とやむことなき人にこそ侍めれしにはつともたゝにやはすてさせ給はんみくる
しきわさかなといひあへりあなかま人にきかすなわつらはしきこともそあるな
とくちかためつゝあま君はおやのわつらひ給よりも此人をいけはてゝみまほし

うおしみてうちつけにそひゐたりしらぬ人なれとみめのこよなうおかしけなれはいたつらになさしとみるかきりあつかひさはきけりさすかに時〻めみあけなとしつゝ涙のつきせすなかるゝをあな心うやいみしくかなしと思ふ人のかはりにほとけのみちひき給へると思ひきこゆるをかひなくなり給はゝ中　くなることをや思はんさるへき契にてこそかくみたてまつらめ猶いさゝか物の給へといひつゝくれとからうしていきいてたりともあやしきふようの人なり人にみせてよるこのかはにおとしいれ給てよといきのしたにいふまれ　く物の給をうれしとおもふにあないみしやいかなれはかくはの給そいかにしてさるところにはおはしつるそとゝへとも物もいはすなりぬ身にもしきすなとやあらんとてみれとこゝはとみゆる所なくうつくしけれはあさましくかなしくまことに人の心まとはさむとていてきたるかりの物にやとうたかふ二日はかりこもりゐてふたりの人をいのりかちするこゐたえすあやしきことを思さはくそのわたりのけすなとのそうつにつかまつりけるかくておはしますなりとてとふらひいてくるも物語なとしていふをきけは古八の宮の御むすめ右大将とのゝかよひ給しことにななやみ給こともなくてにはかにかくれ給へりとてさはき侍その御さうそうのさうしともつかうまつり侍りとて昨日はえまいり侍らさりしといふさやうの人の玉しゐをおにのとりもてきたるにやと思にもかつみる　くある物ともおほえすあやうくおそろしとおほす人〻よへみやられしひはしかこと　くしきけしきもみえさりしをといふことさら事そきていかめしうも侍らさりしといふけからひたるひとゝてたちなからをいかへしつ大将殿は宮の御むすめもち給へりしはうせ給てとしころになりぬる物をたれをいふにかあらんひめ宮をゝきたてまつり給てよにこと心おはせしなといふあま君よろしくなり給ぬかたもあきぬれはかくうたてある所にひさしうおはせんもひんなしとてかへる此人は猶いとよはけなりみちの程もいかゝ物し給はんと心くるしきことゝいひあへり車ふたつしておい人のり給へるにはつかうまつるあまふたりつきのにはこの人をふせてかたはらに今ひとりのりそひてみちすから行もやらすくるまとめてゆまいりなとし給ひえさかもとにをのといふ所にそすみ給けるそこにおはしつくほといとゝをし中やとりをまうくへかりけるなといひて夜ふけておはしつきぬそうつはおやをあつかひむすめのあま君はこのしらぬ人をはくゝみてみないたきおろしつゝやすむ老のやまいのいつともなきかくるしと思給へしとを道のなこりこそしはしわつらひ給けれやうやうよろしうなり給にけれはそうつはのほり給ぬかゝる人なんゐてきたるなとほうしのあたりにはよからぬことなれはみさりし人にはまね

はすあま君もみなくちかためさせつゝもしたつねくる人もやあると思もしつ心
なしいかてさるゐなか人のすむあたりにかゝる人おちあふれけん物まうてなと
したりける人の心ちなとわつらひけんをまゝはゝなとやうの人のたはかりてお
かせたるにやなとそ思よりける河になかしてよといひしひとことよりほかに物
もさらにの給はねはいとおほつかなく思ていつしか人にもなしてみんと思につ
く　くとしておきあかるよもなくいとあやしうのみ物し給へはつゐにいくまし
き人にやと思なからうちすてむもいとおしういみし夢かたりもしいてゝはしめ
よりいのらせしあさりにもしのひやかにけしやくことせさせ給うちはへかくあ
つかふほとに四五月もすきぬいとわひしうかひなきことを思わひてそうつの御
もとに猶おり給へこの人たすけ給へさすかにけふまてもあるはしぬましかりけ
る人をつきしみ両したる物のさらぬにこそあめれあか仏京にいて給はゝこそは
あらめこゝまてはあへなんなといみしきことをかきつゝけてたてまつり給へれ
はいとあやしきことかなかくまてもありける人の命をやかてとりすてゝましか
はさるへき契ありてこそはわれしもみつけゝめ心みにたすけはてむかしそれに
とゝまらすはこうつきにけりと思はんとており給けりよろこひおかみて月比の
有さまをかたるかく久しうわつらふ人はむつかしきことをのつからあるへきを
いさゝかおとろへすいときよけにねちけたる所なくのみ物し給てかきりとみえ
なからもかくていきたるわさなりけりなとおほな　くなく　くの給へはみつけ
しよりめつらかなる人のみありさまかないてとてさしのそきてみ給てけにいと
きやうさくなりける人の御ようめいかなくとくのむくひにこそかゝるかたちに
もおひいて給けめいかなるたかひめにてそこなはれ給けんもしさにやときゝあ
はせらるゝ事もなしやとゝひ給ふさらにきこゆることもなしなにかはつせのく
わんをむの給へる人なりとの給へはなにかそれえんにしたかひてこそみちひき
給はめたねなきことはいかてかなとの給かあやしかり給てすほうはしめたりお
ほやけのめしにたにしたかはすふかくこもりたる山をいて給てすそろにかゝる
人のためになむをこなひさはき給と物のきこえあらんいときゝにくかるへしと
おほし弟子ともゝいひて人にきかせしとかくすそうついてあなかま大とこたち
われむさんのほうしにていむことの中にやふるかいはおほからめと女のすちに
つけてまたそしりとらすあやまつことなし六十にあまりて今さらに人のもとき
おはむはさるへきにこそはあらめとの給へはよからぬ人の物をひんなくいひな
し侍時には仏ほうのきすとなり侍こと也と心よからす思ていふこのすほうのほ
とにしるしみえすはといみしきことゝもをちかひ給てよひとよかちし給へるあ

かつきに人にかりうつしてなにやうのものかくひとをまとはしたるそと有さまはかりいはせまほしうて弟子のあさりとり　くにかちし給月比いさゝかもあらはれさりつる物のけてうせられてをのれはこゝまてまうてきてかくてうせられたてまつるへき身にもあらすむかしはをこなひせし法しのいさゝかなる世にうらみをとゝめてたゝよひありきしほとによき女のあまたすみ給し所にすみつきてかたへはうしなひてしにこの人は心と世を恨給てわれいかてしなんといふことをよるひるの給しにたよりをえていとくらき夜ひとり物し給しをとりてしなりされとくわんおんとさまかうさまにはくゝみ給けれは此そうつにまけたてまつりぬ今はまかりなんとのゝしるかくいふはなにそとゝへはつきたる人物はかなきけにやはか　くしうもいはすさうしみの心ちはさはやかにいさゝかものおほえてみまはしたれはひとりみし人のかほはなくてみなおいほうしゆかみおとろへたる物のみおほかれはしらぬくにゝきにける心ちしていとかなしありしよのこと思いつれとすみけむ所たれといひし人とたにたしかにはか　くしうもおほえすたゝわれはかきりとて身をなけし人そかしいつくにきにたるにかとせめて思いつれはいといみしとものを思なけきてみな人のねたりしにつまとをはなちていてたりしに風ははけしう河浪もあらふきこえしをひとり物おそろしかりしかはきしかたゆくさきもおほえてすのこのはしにあしをさしおろしなから行へきかたもまとはれてかへりいらむもなかそらにて心つよく此世にうせなんと思たちしをおこかましうて人にみつけられむよりはおにもなにもくいうしなへといひつゝつく　くとゐたりしをいときよけなるおとこのよりきていさ給へをのかもとへといひていたく心ちのせしを宮ときこえし人のしたまふとおほえし程より心ちまとひにけるなめりしらぬ所にするをきて此男はきえうせぬとみしをつゐにかくほいのこともせすなりぬると思つゝいみしうなくと思しほとにその後のことはたえていかにも　くおほえす人のいふをきけはおほくの日比もへにけりいかにうきさまをしらぬ人にあつかはれみえつらんとはつかしうつゐにかくていきかへりぬるかと思ふもくちおしけれはいみしうおほえて中　くしつみ給ひつる日比はうつし心もなきさまにて物いさゝかまいることもありつるを露許のゆをたにまいらすいかなれはかくたのもしけなくのみはおはするそうちはへぬるみなとし給へることはさめ給てさはやかにみえ給へはうれしう思きこゆるをとなく　くたゆむおりなくそひゐてあつかひきこえ給ある人ゝもあたらしき御さまかたちをみれは心をつくしてそおしみまもりける心には猶いかてしなんとそ思わたり給へとさはかりにていきとまりたる人の命なれはいとしうね

くてやう　くかしらもたけ給へは物まいりなとし給にそ中　くおもやせもていくいつしかとうれしう思きこゆるにあまになし給てよさてのみなんいくやうもあるへきとのたまへはいとおしけなる御さまをいかてかさはなしたてまつらむとてたゝいたゝき許をそき五かいはかりをうけさせたてまつる心もとなけれともとよりおれ　くしき人の心にてえさかしくしゐてもの給はすそうつは今はかはかりにていたはりやめたてまつり給へといひをきてのほり給ぬ夢のやうなる人をみたてまつる哉とあま君はよろこひてせめておこしするゑつゝ御くしてつからけつり給さはかりあさましうひきゆひてうちやりたりつれといたうもみたれすときはてたれはつや　くとけうらなり一とせたらぬつくもかみおほかる所にてめもあやにいみしき天人のあまくたれるをみたらむやうに思ふもあやうき心ちすれとなとかいと心うくかはかりいみしく思きこゆるに御心をたてゝはみえ給いつくにたれときこえし人のさる所にはいかておははせしそとせめてとふをいとはつかしと思てあやしかりしほとにみなわすれたるにやあらむありけんさまなともさらにおほえ侍すたゝほのかに思いつることゝてはたゝいかてこの世にあらしと思つゝ夕暮ことにはしちかくてなかめし程にまへちかくおほきなる木のありししたより人のいてきてゐていく心ちなむせしそれより外のことはわれなからたれともえ思いてられ侍すといとらうたけにいひなして世中になをありけりといかて人にしられしきゝつくる人もあらはいといみしくこそとてない給あまりとふをはくるしとおほしたれはえとはすかくやひめをみつけたりけんたけとりのおきなよりもめつらしき心ちするにいかなる物のひまにきえうせんとすらむとしつ心なくそおほしける此あるしもあてなる人なりけりむすめのあま君はかむたちめの北のかたにてありけるかその人なく成給て後むすめたゝひとりをいみしくかしつきてよききむたちをむこにして思あつかひけるをそのむすめの君のなくなりにけれは心うしいみしと思いりてかたちをもかへかゝる山さとにはすみはしめたりける也夜とゝもにこひわたる人のかたみにも思よそへつへからむ人をたにみいてゝしかなつれ　くも心ほそきまゝに思なけきけるをかくおほえぬ人のかたちけはひもまさりさまなるをえたれはうつゝのことゝもおほえすあやしき心ちしなからうれしと思ねひにたれといときよけによしありて有さまもあてはかなりむかしの山さとよりは水のをともなこやかなりつくりさまゆへある所こたちおもしろくせむさいもおかしくゆへをつくしたり秋になり行は空のけしきもあはれなり門田のいねかるとて所につけたる物まねひしつゝわかき女ともはうたうたひけうしあへりひたひきならすをともおかしくみしあ

つまちのことなとも思ひいてられてかの夕きりの宮す所のおはせし山里よりは
今すこしいりて山にかたかけたる家なれはまつかせしけく風の音もいと心ほそ
きにつれ　くにをこなひをのみしつゝいつとなくしめやかなりあま君そつきな
とあかきよはきむなとひき給少将のあま君なといふ人はひはひきなとしつゝあ
そふかゝるわさはし給やつれ　くなるになといふむかしもあやしかりける身に
て心のとかにさやうの事すへき程もなかりしかはいさゝかおかしきさまならす
もおひいてにける哉とかくさたすきにける人の心をやるめるおり　くにつけて
は思ひいつるをあさましく物はかなかりけるとわれなからくちおしけれはてな
らひに

　身をなけし涙の河のはやき瀬をしからみかけてたれかとゝめし思の外に心
うけれは行するもうしろめたくうとましきまて思やらる月のあかき夜な　くお
い人ともはえむに歌よみいにしる思いてつゝさま　く物かたりなとするにいら
ふへきかたもなけれはつく　くと打なかめて

　われかくてうき世の中にめくるともたれかはしらむ月の都に今はかきりと
思し程は恋しき人おほかりしかとこと人ゝはさしもおもひいてられすたゝおや
いかにまとひ給けんめのとよろつにいかて人なみ　くになさむと思いられしを
いかにあえなき心ちしけんいつくにあらむわれよにある物とはいかてかしらむ
おなし心なる人もなかりしまゝによろつへたつることなくかたらひみなれたり
し右近なともおり　くは思いてらるわかき人のかゝる山里に今はと思たえこも
るはかたきわさなりけれはたゝいたく年へにけるあま七八人そつねの人にては
ありけるそれらかむすめむまこやうの物とも京に宮つかへするもことさまにて
あるも時　くそきかよひけるかやうの人につけてみしわたりにいきかよひをの
つからよにありけりとたれにも　くきかれたてまつらむことゝみしくはつかし
かるへしいかなるさまにてさすらへけんなと思やりよつかすあやしかるへきを
思へはかゝる人ゝにかけてもみえすたゝしゝうこもきとてあま君のわか人にし
たりけるふたりをのみそ此御かたにいひわけたりけるみめも心さまもむかしみ
し宮ことりにゝたるはなしなにことにつけても世中にあらぬ所はこれにやとそ
かつは思なされけるかくのみ人にしられしとしのひ給へはまことにわつらはし
かるへきゆへある人にも物し給らんとてくはしきことある人ゝにもしらせすあ
ま君のむかしのむこの君今は中将にて物し給けるおとうとのせんしの君そうつ
の御もとに物し給ける山こもりしたるをとふらひにはらからのきみたちつねに
のほりけりよ川にかよふみちのたよりによせて中将こゝにおはしたりさきうち

をひてあてやかなるおとこのいりくるをみいたしてしのひやかにおはせし人の御さまけはひそさやかに思いてらるゝこれもいと心ほそきすまゐのつれ　くなれとすみつきたる人〻は物きよけにおかしうしなしてかきほにうへたるなてしこもおもしろくをみなへしき経なとさきはしめたるに色〻のかりきぬすかたのをのこともものわかきあまたして君もおなしさうそくにてみなみをもてによひすへたれはうちなかめてゐたりとし廿七八の程にてねひとゝのひ心ちなからぬさまもてつけたりあま君さうしくちにき丁たてゝたいめんし給まつうちなきて年ころのつもるにはすきにし方いとゝけとをくのみなん侍へるを山さとのひかりに猶まちきこえさすることのうちわすれすやみ侍らぬをかつはあやしく思給ふるとの給へは心のうちあはれにすきにし方のことゝも思給へられぬおりなきをあなかちにすみはなれかほなる御ありさまにをこたりつゝなん山こもりもうら山しうつねにいてたち侍をおなしくはなとしたひまとはさるゝ人〻にさまたけらるゝやうに侍てなんけふはみなはふきすてゝ物し給へるとの給山こもりの御うらやみは中　くいまやうたちたる御物まねひになむゝかしをおほしわすれぬ御心はへもよになひかせ給はさりけるとをろかならす思給へらるゝおりおほくなといふ人〻に水はんなとやうの物くはせ君にもはすのみなとやうの物いたしたれはなれにしあたりにてさやうのこともつゝみなき心ちしてむら雨のふりいつるにとめられて物かたりしめやかにし給いふかひなく成にし人よりも此君の御心はへなとのいと思やうなりしをよその物に思なしたるなんいとかなしきなと忘かたみをたにとゝめ給はすなりにけんと恋しのふ心なりけれはたまさかにかく物し給へるにつけてもめつらしくあはれにおほゆへかめるとはすかたりもしいてつへしひめ君はわれは我と思いつる方おほくてなかめいたし給へるさまいとうつくししろきひとへのいとなさけなくあさやきたるにはかまもひはた色にならひたるにやひかりもみえすくろきをきせたてまつりたれはかゝることゝもゝみしにはかはりてあやしうもあるかなと思つゝこは　くしういらゝきたる物ともき給へるしもいとおかしきすかたなり御まへなる人〻こひめ君のおはしたる心ちのみし侍つるに中将殿をさへみたてまつれはいとあはれにこそおなしくは昔のさまにておはしまさせはやいとよき御あはひならむかしといひあへるをあないみしや世にありていかにもいかにも人にみえんこそゝれにつけてそむかしのこと思いてらるへきさやうのすちは思たえてわすれなんと思あま君いり給へるまにまらうとあめのけしきをみわつらひて少将といひし人のこゑをきゝしりてよひよせ給へり昔みし人〻はみなこゝに物せらるらんやと思ひなからも

かうまいりくることもかたくなりにたるを心あさきにやたれもたれもみなし給らんなとの給つかうまつりなれにし人にてあはれなりし昔のことゝもゝ思いてたるつゐてにかのらうのつまいりつる程風のさはかしかりつるまきれにすたれのひまよりなへてのさまにはあるましかりつる人のうちたれかみのみえつるはよをそむき給へるあたりにたれそとなんみおとろかれつるとの給姫君のたちいて給へるうしろてをみ給へりけるなめりとおもひいてゝましてこまかにみせたらは心とまり給なんかしむかし人はいとこよなうをとり給へりしをたにまた忘かたくし給めるをと心ひとつに思てすきにし御ことをわすれかたくなくさめかね給めりし程におほえぬ人をえたてまつり給てあけ暮のみ物に思きこえ給めるをうちとけ給へる御有さまをいかて御らんしつらんといふかゝることこそはありけれとおかしくてなに人ならむけにいとおかしかりつとほのかなりつるを中く思いつこまかにとへとそのまゝにもいはすをのつからきこしめしてんとのみいへはうちつけにとひ尋むもさまあしき心ちして雨もやみぬ日も暮ぬへしといふにそゝのかされて出給まへちかきをみなへしをおりてなにゝほふらんとくちすさひてひとりこちたてり人の物いひをさすかにおほしとかむるこそなとこたいの人ともは物めてをしあへりいときよけにあらまほしくもねひまさり給にけるかなおなしくは昔のやうにてもみたてまつらはやとてとう中納言の御あたりにはたえすかよひ給やうなれと心もとゝめ給はすおやの殿かちになん物し給とこそいふなれとあま君もの給て心うく物をのみおほしへたてたるなむいとつらき今は猶さるへきなめりとおほしなしてはれ くしくもてなし給へこの五とせむとせ時のまも忘す恋しくかなしと思つる人のうへもかくみたてまつりて後よりはこよなく思わすれにて侍思きこえ給へき人ゝ世におはすとも今は世になき物にこそやう くおほしなりぬらめよろつのことさしあたりたるやうにはえしもあらぬわさになむといふにつけてもいとゝ涙くみてへたてきこゆる心は侍らねとあやしくていき返ける程によろつのこと夢の世にたとられてあらぬ世に生れたらん人はかゝる心ちやすらんとおほえ侍れは今は知へき人よにあらんとも思ひ出すひたみちにこそむつましく思きこゆれとの給さまもけになに心なくうつくしくうちゑみてそまもりゐ給へる中将は山にははしつきて僧都もめつらしかりて世中の物語し給ふその夜はとまりてこゑたうとき人に経なとよませて夜ひとよあそひ給せむしの君こまかなる物かたりなとするつゐてにをのに立よりて物あはれにも有しかな世をすてたれと猶さはかりの心はせある人はかたうこそなとあるつゐてに風の吹あけたりつるひまよりかみいとなかくおかしけな

る人こそみえつれあらはなりとや思つらんたちてあなたにいりつるうしろてなへての人とはみえさりつさやうの所によき女はをきたるましき物にこそあめれあけ暮みる物はほうしなりをのつからめなれておほゆらんふひんなることそかしとの給せんしの君この春はつせにまうてゝあやしくてみいてたる人となむきゝ侍しとてみぬことなれはこまかにはいはすあはれなりけること哉いかなる人にかあらむ世中をうしとてそさる所にはかくれゐけむかし昔物かたりの心ちもするかなとの給又の日かへり給にもすきかたくなむとておはしたりさるへき心つかひしたりけれは昔おもひいてたる御まかなひの少将のあまなとも袖くちさまことなれともおかしいとゝいやめにあま君は物し給物かたりのつゐてにしのひたるさまに物し給らんはたれにかとゝひ給わつらはしけれとほのかにもみつけてけるをかくしかほならむもあやしとてわすれわひ侍ていとゝつみふかうのみおほえ侍つるなくさめにこの月ころみ給ふる人になむいかなるにかいと物思しけきさまにてよにありと人にしられんことをくるしけに思て物せらるれはかゝるたにのそこにはたれかは尋きかんと思つゝ侍をいかてかはきゝゝあらはさせ給へらんといらふうちつけ心ありてまいりこむにたに山ふかきみちのかことはきこえつへしましておほしよそふらんかたにつけてはこと　くにへたて給ましきことにこそはいかなるすちに世をうらみ給人にかなくさめきこえはやなとゆかしけにの給いて給とてたゝうかみに

あたしのゝ風になひくなをみなへしわれしめゆはんみち遠くともとかきて少将のあましていれたりあま君もみ給て此御返かゝせ給へいと心にくきけつき給へる人なれはうしろめたくもあらしとそゝのかせはいとあやしきてをはいかてかとてさらにきゝ給はねははしたなきことなりとてあま君きこえさせつるやうによつかす人にゝぬひとにてなむ

うつしうへて思みたれぬをみなへしうき世をそむく草の庵にとありこたみはさもありぬへしと思ゆるしてかへりぬふみなとわさとやらんはさすかにうひくしうほのかにみしさまは忘す物思ふらんすちなにことゝしらねとあはれなれは八月十余日のほとにこたかかりのついてにおはしたり例のあまよひいてゝひとめみしよりしつ心なくてなむとの給へりいらへ給へくもあらねはあま君まつちの山となんみ給ふるといひいたし給たいめんし給へるにも心くるしきさまにて物し給ときゝ侍し人の御うへなんのこりゆかしく侍つるなにことも心にかなはぬ心ちのみし侍れは山すみもし侍らまほしき心ありなからゆるい給ましき人ゝにおもひさはりてなむすくし侍よに心ちよけなる人のうへはかくくんした

る人の心からにやふさはしからすなん物思給らん人に思ことをきこえはやなといと心とゝめたるさまにかたらひ給心ちよけならぬ御ねかひはきこえかはし給はんにつきなからぬさまになむみえ侍れと例の人にてはあらしといとうたゝあるまて世をうらみ給めれはのこりすくなきよはひともたに今はとそむきはへる時はいと物心ほそくおほえ侍し物を世をこめたるさかりにはつゐにいかゝとなんみ給へ侍とおやかりていふいりてもなさけなし猶いさゝかにてもきこえ給へかゝる御すまひはすゝろなることもあはれしるこそ世のつねのことなれなとこしらへてもいへと人に物きこゆらん方もしらすなにこともいふかひなくのみこそといとつれなくてふし給へりまらうとはいつらあな心うあきを契れるはすかし給にこそ有けれなと恨みつゝ

松虫のこゑをたつねてきつれともまた萩はらの露にまとひぬあないとおしこれをたになとせむれはさやうによついたらむこといひいてんもいと心うく又いひそめてはかやうのおり　くにせめられむもむつかしうおほゆれはいらへをたにしたまはねはあまりいふかひなく思あへりあま君はやうはいまめきたる人にそありけるなこりなるへし

秋の野ゝ露わけきたるかり衣むくらしけれる宿にかこつなとなんわつらはしかりきこえ給めるといふをうちにも猶かく心より外によにありとしられはしむるをいとくるしとおほす心のうちをはしらておとこ君をもあかす思いてつゝ恋わたる人ゝなれはかくはかなきつゐてにもうちかたらひきこえ給はんに心より外によにうしろめたくはみえ給はぬ物をよのつねなるすちにはおほしかけすともなさけなからぬ程に御いらへはかりはきこえ給へかしなとひきうこかしつへくいふさすかにかゝるこたいの心ともにはありつかすいまめきつゝこしおれ歌このましけにわかやくけしきともはいとうしろめたうおほゆかきりなくうき身なりけりとみはてゝし命さへあさましうなかくていかなるさまにさすらふへきならむひたふるになき物と人にみきゝすてられてもやみなはやと思ひふし給へるに中将は大かた物思はしきことのあるにやいといたう打なけきしのひやかにふゑをふきならしてしかのなくねになとひとりこつけはひまことに心ちなくはあるましすきにし方の思いてらるゝにも中　く心つくしに今はしめてあはれとおほすへき人はたかたけなれはみえぬ山ちにもえ思なすましうなんとうらめしけにていてなむとするにあま君なとあたらよを御らんしさしつるとてゐさりいて給へりなにかをちなるさとも心み侍れはなといひすさみていたうすきかましからんもさすかにひんなしいとほのかにみえしさまのめとまりしはかりつれ

くなる心なくさめに思出つるをあまりもてはなれおくふかなるけはひも所のさまにあはすすさましと思へはかへりなむとするをふえのねさへあかすいとゝおほえて

ふかき夜の月をあはれとみぬ人や山のはちかき宿にとまらぬとなまかたはなることをかくなんきこえ給ふといふに心ときめきして

山のはに入まて月をなかめみんねやの板まもしるしありやとなといふにこのおほあま君ふえのねをほのかにきゝつけたりけれはさすかにめてゝいてきたりこゝかしこうちしはふきあさましきわなゝきこゑにて中　くむかしのことなともかけていはすたれとも思わかぬなるへしいてそのきむのことひき給へよこふえは月にはいとおかしき物そかしいつらこたちことゝりてまいれといふにそれなめりとをしはかりにきけといかなる所にかゝる人いかてこもりゐたらむさためなき世そこれにつけてあはれなるはんしきてうをいとおかしうふきていつらさらはとのたまふむすめあま君これもよき程のすき物にてむかしきゝ侍しよりもこよなくおほえ侍は山風をのみきゝなれ侍にけるみゝからにやとていてやこれもひかことに成て侍らむといひなからひくいまやうはおさ　くなへての人の今はこのます成行物なれは中　くめつらしくあはれにきこゆ松風もいとよくもてはやすふきてあはせたるふえのねに月もかよひてすめる心ちすれはいよ

くめてられてよゐまとひもせすおきゐたり女はむかしはあつまことをこそはこともなくひきはへりしかと今のよにはかはりにたるにやあらむこのそうつのきゝにくし念仏より外のあたわさなせそとはしたなめられしかはなにかはとてひき侍らぬなりさるはいとよくなることも侍りといひつゝけていとひかまほしと思たれはいとしのひやかにうちわらひていとあやしきことをもせいしきこえ給けるそうつかなこくらくといふなる所にはほさつなともみなかゝることをして天人なともまひあそふこそたうとかなれをこなひまきれつみうへきことかはこよひきゝ侍らはやとすかせはいとよしと思ていてとのもりのくそあつまとりてといふにもしはふきはたえす人ゝはみくるしと思へとそうつをさへうらめしけにうれへていひきかすれはいとおしくてまかせたりとりよせてたゝ今のふえのねをもたつねすたゝをのか心をやりてあつまのしらへをつまさはやかにしらふみなこと物はこゑをやめつるをこれをのみめてたると思てたけふちゝり　くたりたんなゝとかきかへしはやりかにひきたることはともわりなくふるめきたりいとおかしう今の世にきこえぬことはこそはひき給けれとほむれはみゝほの

くしくかたはらなる人にとひきゝていまやうのわかき人はかやうなることを

そこのまれさりけるこゝに月ころ物し給める姫君かたちいとけうらに物し給めれともはらかやうなるあたわさなとし給はすうもれてなん物し給めると我かしこにうちあさわらひてかたるをあま君なとはかたはらいたしとおほすこれにことみなさめてかへり給程も山おろし吹てきこえくるふえのねいとおかしうきこえておきあかしたるつとめてよへはかた　く心みたれ侍しかはいそきまかて侍し

　わすられぬ昔のこともふえ竹のつらきふしにもねそなかれける猶すこしおほししるはかりをしへなさせ給へしのはれぬへくはすき　くしきまてもなにかはとあるをいとゝわひたるは涙とゝめかたけなるけしきにてかき給ふ

　笛のねに昔のこともしのはれてかへりし程も袖そぬれにしあやしう物思ひしらぬにやとまてみ侍ありさまはおい人のとはすかたりにきこしめしけむかしとありめつらしからぬもみ所なき心ちしてうちをかれけんおきのはにをとらぬほと　くにをとつれわたるいとむつかしうもあるかな人の心はあなかちなる物なりけりとみしりにしおり　くもやう　く思いつるまゝに猶かゝるすちのことひとにも思はなたすへきさまにとくなし給てよとて経ならいてよみ給心のうちにもねんし給へりかくよろつにつけて世中を思すつれはわかき人とておかしやかなることもことになくむすほゝれたる本上なめりと思かたちのみるかひ有うつくしきによろつのとかみゆるしてあけくれのみ物にしたりすこしうちはらひ給おりはめつらしくめてたき物に思へり九月になりて此あま君はつせにまうつとしころいと心ほそき身にこひしき人のうへも思やまれさりしをかくあらぬ人ともおほえ給はぬなくさめをえたれはくわんをんの御しるしうれしとてかへり申たちてまうて給なりけりいさ給へひとやはしらむとするおなし仏なれとさやうの所にをこなひたるなむしるしありてよきためしおほかるといひてそゝのかし立れとむかしはゝ君めのとなとのかやうにいひしらせつゝたひ　くまうてさせしをかひなきにこそあめれ命さへ心にかなはすたくひなきいみしきめをみるはといと心うきうちにもしらぬ人にくしてさるみちのありきをしたらんよと空おそろしくおほゆ心こはきさまにはいひもなさて心ちのいとあしうのみ侍れはさやうならんみちの程にもいかゝなとつゝましうなむとの給ふ物おちはさもし給へき人そかしと思てしゐてもいさなはす

　はかなくて世にふる河のうきせには尋もゆかし二もとの杉とてならひにましりたるをあま君みつけてふたもとはまたもあひきこえんと思給人あるへしとたはふれことをいひあてたるにむねつふれておもてあかめ給へるいとあい行つ

きうつくしけなり

ふる河の杉の本たちしらねとも過にし人によそへてそみることなることなきいらへをくちとくいふしのひてといへとみな人したひつゝこゝには人すくなにておはせんを心くるしかりて心はせある少将のあま左衛門とてあるおとなしき人わらははかりそとゝめたりけるみないてたちけるをなかめいてゝあさましきことを思なからも今はいかゝせむとたのもし人に思ふ人ひとり物し給はぬは心ほそくもあるかなといとつれ　くなるに中将の御ふみあり御らんせよといへときゝもいれ給はすいとゝ人もみえすつれ　くときしかた行さきを思くむし給ふくるしきまてもなかめさせ給かな御五をうたせ給へといふいとあやしうこそはありしかとはの給へとうたむとおほしたれはゝむとりにやりてわれはと思てせんせさせたてまつりたるにいとこよなけれは又てなをしてうつあまうへとうかへらせ給はなん此御五みせたてまつらむかの御五そいとつよかりしそうつの君はやうよりいみしうこのませ給てけしうはあらすとおほしたりしをいときせい大とこになりてさしいてゝこそうたさらめ御五にはまけしかしときこえ給しにつゐにそうつなんふたつまけ給しきせいか五にはまさらせ給へきなめりあないみしとけうすれはさたすきたるあまひたいのみつかぬに物このみするにむつかしきこともしそめてける哉と思て心ちあしとてふし給ぬ時　くはれ　くしうもてなしておはしませあたら御身をいみしうしつみてもてなさせ給こそくちおしう玉にきすあらん心ちし侍れといふ夕暮の風の音もあはれなるに思いつることもおほくて

心には秋の夕をわかねともなかむる袖に露そみたるゝ月さしいてゝおかしき程にひるふみありつる中将おはしたりあなうたてこはなにそとおほえ給へはおくふかく入給をさもあまりにもおはします物かな御心さしのほともあはれまさるおりにこそ侍めれほのかにもきこえ給はんこともきかせ給へしみつかんことのやうにおほしめしたるこそなといふにいとはしたなくおほゆおはせぬよしをいへとひるのつかひのひと所なととひきゝたるなるへしいとことおほくうらみて御こゑもきゝ侍らしたゝけちかくてきこえんことをききにくしともいかにともおほしことはれとよろつにいひわひていと心うく所につけてこそ物のあはれもまされあまりかゝるはなとあはめつゝ

山里の秋の夜ふかきあはれをもゝの思ふ人は思こそしれをのつから御心もかよひぬへきをなとあれはあま君おはせてまきらはしきこゆへき人も侍らすいとよつかぬやうならむとせむれは

憂物と思もしらてすくす身を物おもふ人とひとはしりけりわさといらへともなきをきゝてつたへきこゆれはいとあはれと思て猶たゝいさゝかいて給へときこえうこかせとこの人〻をわりなきまてうらみ給あやしきまてつれなくそみえ給やとていりてみれは例はかりそめにもさしのそき給はぬ老人の御かたにいり給にけりあさましう思てかくなんときこゆれはかゝる所になかめ給らん心のうちのあはれにおほかたのありさまなともなさけなかるましき人のいとあまり思しらぬ人よりもけにもてなし給めるこそそれ物こりし給へるか猶いかなるさまに世をうらみていつまておはすへき人そなとありさまとひていとゆかしけにのみおほいたれとこまかなることはいかてかはいひきかせんたゝしりきこえ給へき人のとし比はうと　くしきやうにてすくし給しを初せにまうてあひ給て尋きこえ給つるとそいふひめ君はいとむつかしとのみきくおい人のあたりにうつふし　くていもねられすよひまとひはえもいはすおとろ　くしきいひきしつゝまへにもうちすかひたるあまともふたりふしてをとらしといひきあはせたりいとおそろしうこよひこの人〻にやくはれなんとおもふもおしからぬ身なれとれいの心よはさはひとつはしあやうかりてかへりきたりけん物のやうにわひしくおほゆこもきともにゐておはしつれと色めきてこのめつらしきおとこのえんたちゐたるかたにかへりゐにけりいまやくる　くと待ゐたまへれといとはかなきたのもし人なりや中将いひわつらひてかへりにけれはいとなさけなくむもれてもおはしますかなあたら御かたちをなとそしりてみなひと所にねぬ夜なかはかりにやなりぬらんと思ほとにあま君しはふきおほゝれておきにたりほかけにかしらつきはいとしろきにくろき物をかつきてこのきみのふし給へるあやしかりていたちとかいふなる物かさるわさするひたひにてをあてゝあやしこれはたれそとしふねけなるこゑにてみおこせたるさらにたゝいまくひてむとするとそおほゆるおにのとりもてきけん程は物のおほえさりけれは中　く心やすしいかさまにせんとおほゆるむつかしさにもいみしきさまにていきかへり人になりて又ありし色　くのうきことを思ひみたれむつかしともおそろしとも物をおもふよしなましかはこれよりもおそろしけなる物の中にこそはあらましかと思やらる昔よりのことをまとろまれぬまゝにつねよりも思つゝくるにいと心うくおやときこえけん人の御かたちもみたてまつらすはるかなるあつまをかへる　く年月をゆきてたまさかに尋よりてうれしたのもしと思きこえしはらからの御あたりをもおもはすにてたえすきさるかたに思さため給し人につけてやう　く身のうさをもなくさめつへきゝはめにあさましうもてそこなひたる身を思もてゆけは

宮をすこしもあはれとおもひきこえけん心そいとけしからぬたゝこの人の御ゆかりにさすらへぬるそとおもへはこしまの色をためしに契給しをなとておかしと思きこえけんとこよなくあきにたる心ちすはしめよりうすきなからものとやかに物し給し人はこのおりかのおりなと思ひいつるそこよなかりけるかくてこそありけれときゝつけられたてまつらむはつかしさは人よりまさりぬへしさすかにこの世にはありし御さまをよそなからたにいつかみんするとうち思猶わろの心やかくたにおもはしなと心ひとつをかへさふからうして鳥のなくをきゝていとうれしはゝの御こゑをきゝたらむはましていかならむと思あかして心ちもいとあしともにてわたるへき人もとみにこねは猶ふし給つるにいひきの人はいととくおきてかゆなとむつかしきことゝもをもてはやしておまへにとくきこしめせなとよりきていへとまかなひもいとゝ心つきなくうたてみしらぬ心ちしてなやましくなんとことなしひ給をしひていふもいとこちなしけす　くしきほうしはらなとあまたきてそうつけふおりさせ給へしなとにはかにはととふなれは一品宮の御物のけになやませ給ける山のさすみすほうつかまつらせ給へと猶そうつまいらせ給はてはしるしなしとて昨日二たひなんめし侍し右大臣殿の四位の少将よへ夜ふけてなんのほりおはしましてきさいの宮の御文なと侍けれはおりさせ給なりなといとはなやかにいひなすはつかしうともあひてあまになし給てよといはんさかしら人すくなくてよきおりにこそと思へはおきて心ちのいとあしうのみ侍を僧都のおりさせ給へらんにいむことうけ侍らんとなむ思侍をさやうにきこえ給へとかたらひ給へはほけ　くしう打うなつく例のかたにおはしてかみはあま君のみけつり給をこと人にてふれさせんもうたておほゆるにてつからはたえせぬことなれはたゝすこしときくたしておやに今一たひかうなからのさまをみえすなりなむこそ人やりならすいとかなしけれいたうわつらひしけにやかみもすこしおちほそりたる心ちすれとなにはかりもおとろへすいとおほくて六尺はかりなるすゑなとそいとうつくしかりけるすちなともいとこまかにうつくしけなりかゝれとてしもとひとりこちゐ給へりくれかたにそうつものし給へりみなみおもてはらひしつらひてまろなるかしらつきゆきちかひさはきたるも例にかはりていとおそろしき心ちすはゝの御かたにまいり給ていかにそ月比はなといふひんかしの御方は物まうてし給にきとかこのおはせし人はなをものし給やなとゝひ給しかこゝにとまりてなん心ちあしとこそ物し給ていむことうけたてまつらんとの給つるとかたるたちてこなたにいましてこゝにやおはしますとてき丁のもとについゐ給へはつゝましけれとゐさりよりていらへし給ふ

いにてみたてまつりそめてしもさるへき昔の契ありけるにこそと思給へて御いのりなともねんころにつかうまつりしをほうしはその事となくて御ふみきこえうけ給はらむもひんなけれはしねんになんをろかなるやうになり侍ぬるいとあやしきさまによをそむき給へる人の御あたりいかておはしますらんとの給世中に侍らしと思たち侍し身のいとあやしくていまゝて侍つるを心うしと思侍物からよろつにせさせ給ける御心はえをなむいふかひなき心ちにも思給へしらるゝを猶よつかすのみつゐにえとまるましく思給へらるゝをあまになさせ給てよ世中に侍とも例の人にてなからふへくも侍らぬ身になむときこえ給またいとゆくさきとをけなる御程にいかてかひたみちにしかはおほしたゝむかへりてつみある事也思立て心をおこし給ほとはつよくおほせと年月ふれは女の御身といふ物いとたい　くしき物になんとのたまへはをさなく侍しほとより物をのみ思へき有さまにておやなともあまになしてやみましなとなむ思の給しましてすこしもの思しりて後は例の人さまならてのちの世をたにと思心ふかゝりしをなくなるへき程のやう　くちかくなり侍にや心ちのいとよはくのみなり侍を猶いかてとてうちなきつゝの給あやしくかゝるかたちありさまをなとて身をいとはしく思はしめ給けん物のけもさこそいふなりしかと思あはするにさるやうこそはあらめいまゝてもいきたるへき人かはあしき物のみつけそめたるにいとおそろしくあやうきことなりとおほしてとまれかくまれおほしたちての給を三ほうのいとかしこくほめ給こと也ほうしにてきこえかへすへきことにあらす御いむことはいとやすくさつけたてまつるへきをきふなることにまかんてたれはこよひかの宮にまいるへく侍りあすよりやみすほうはしまるへく侍らん七日はてゝまかてむにつかまつらむとの給へはかのあま君おはしなはかならすいひさまたけてんといとくちおしくてみたり心ちのあしかりし程にみたるやうにていとくるしう侍れはをもくならはいむことかひなくや侍らん猶けふはうれしきおりとこそ思ひ侍れとていみしうなき給へはひしり心にいと　くおしく思てよやふけ侍ぬらん山よりおり侍こと昔はことゝもおほえ給はさりしを年のおうるまゝにはたへかたく侍けれはうちやすみてうちにはまいらんと思侍をしかおほしいそくことなれはけふつかうまつりてんとの給にいとうれしくなりぬはさみとりてくしのはこのふたさしいてたれはいつら大とこたちこゝにとよふはしめみつけたてまつりしふたりなからともにありけれはよひいれて御くしおろしたてまつれといふけにいみしかりし人の御有さまなれはうつし人にてはよにおはせんもうたてこそあらめとこのあさりもことはりに思にき丁のかたひらのほころひより御か

みをかきいたし給つるかいとあたらしくおかしけなるになむしはしはさみをもてやすらひけるかゝるほと少将のあまはせうとのあさりのきたるにあひてしもにゐたりさゑもんはこのわたくしのしりたる人にあいしらふとてかゝる所にとりてはみなとり　くに心よせの人〻めつらしうていてきたるにはかなき事しけるみいれなとしけるほとにこもき独してかゝることなんと少将のあまにつけたりけれはまとひてきてみるにわか御うへのきぬけさなとをことさら許とてきせたてまつりておやの御かたおかみたてまつり給へといふにいつかたともしらぬほとなむえしのひあへ給はてなき給にけるあなあさましやなとかくあふなきわさはせさせ給うへかへりおはしてはいかなることをの給はせむといへとかはかりにしそめつるをいひみたるも物しと思てそうついさめ給へはよりてもえさまたけするてん三かいちうなといふにもたちはてゝし物をと思いつるもさすかなりけり御くしもそきわつらひてのとやかにあま君たちしてなをさせ給へといふひたひはそうつそゝき給かゝる御かたちやつし給てくひ給なゝとたうときことゝもとききかせ給とみにせさすへくもあらすみないひしらせ給へることをうれしくもしつるかなとこれのみそ仏はいけるしるしありてとおほえ給けるみな人〻いてしつまりぬよるの風のをとにこの人〻は心ほそき御すまひもしはしの事そ今いとめてたくなり給なんとたのみきこえつる御身をかくしなさせ給てのこりおほかる御世のすゑをいかにせさせ給はんとするそおひおとろへたる人たに今はかきりと思はてられていとかなしきわさに侍といひしらすれと猶たゝ今は心やすくうれし世にふへき物とは思かけすなりぬるこそはいとめてたきことなれとむねのあきたる心ちそし給けるつとめてはさすかに人のゆるさぬことなれはかはりたらむさまみえんもいとはつかしくかみのすそのにはかにおほとれたるやうにしとけなくさへそかれたるをむつかしきことゝもいはてつくろはん人もかなと何事につけてもつゝましくてくらうしなしておはす思ふ事を人にいひつゝけんことのはゝもとよりたにはか　くしからぬ身をまいてなつかしうことはるへき人さへなけれはたゝすゝりにむかひて思あまるおりにはてならひをのみたけきことゝはかきつけ給

なきものに身をも人をも思つゝ捨てし世をそさらにすてつる今はかくてかきりつるそかしとかきても猶身つからいとあはれとみたまふ

かきりそと思なりにし世間を返　くもそむきぬるかなおなしすちのことをとかくかきすさひゐ給へるに中将の御文あり物さはかしうあきれたる心ちしあへる程にてかゝることなといひてけりいとあへなしと思てかゝる心のふかくあ

りける人なりけれははかなきいらへをもしそめしと思はなるゝ成けりさてもあへなきわさかないとおかしくみえしかみのほとをたしかにみせよとひと夜もかたらひしかはさるへからむおりにといひしものをといとくちおしうて立かへりきこえんかたなきは

きし遠く漕はなるらむあま舟に乗をくれしといそかるゝかな例ならすとりてみ給物のあはれなるおりにいまはと思もあはれなる物からいかゝおほさるらんいとはかなきものゝはしに

心こそうき世の岸をはなるれと行ゑもしらぬあまのうき木をとれいのてならひにし給へるをつゝみてたてまつるかきうつしてたにこそとの給へと中　く　かきそこなひ侍なんとてやりつめつらしきにもいふかたなくかなしうなむおほえける物まうての人かへり給て思さはき給ことかきりなしかゝる身にてはすゝめきこえんこそはと思なし侍れとのこりおほかる御身をいかてへたまはむとすらむをのれは世に侍らんことけふあすともしりかたきにいかてうしろやすくみたてまつらむとよろつに思給へてこそ仏にも祈きこえつれとふしまろひつゝいといみしけに思給へるにまことのおやのやかてからもなき物と思まとひ給けんほとおしはからるゝそまついとかなしかりける例のいらへもせてそむきゐ給へるさまいとわかくうつくしけなれはいと物はかなくそおはしける御心なれとなく　く御そのことなといそき給にひ色はてなれにしことなれはこうちきけさなとしたりある人ゝもかゝる色をぬいきせたてまつるにつけてもいとおほえすうれしき山里のひかりとあけくれみたてまつりつる物を口おしきわさかなとあたらしかりつゝ僧都をうらみそしりけり一品宮の御なやみけにかの弟子のいひしもしるくいちしるきことゝもありてをこたらせ給にけれはいよ　くいとたうとき物にいひのゝしる名残もおそろしとてみすほうのへさせ給へはとみにもえかへりいらてさふらひ給に雨なとふりてしめやかなる夜めしてよゐにさふらはせ給日ころいたうさふらひこうしたる人はみなやすみなとしておまへに人すくなにてちかくおきたる人すくなきおりにおなし御丁におはしまして昔よりたのませ給中にも此たひなんいよ　く後の世もかくこそはとたのもしきことまさりぬるなとの給はす世の中に久しうはへるましきさまに仏なともをしへ給へることゝも侍るうちにことしらい年すくしかたきやうになむ侍れは仏をまきれなくねんしつとめ侍らんとてふかくこもり侍をかゝるおほせことにてまかりいて侍にしなとけいし給御ものゝけのしふねきことをさま　くになのるかおそろしきことなとの給つゐてにいとあやしうけうのことをなんみ給へしこの三月に年老て

侍はゝの願有てはつせにまうてゝ侍しかへさの中やとりにうちの院といひ侍所にまかりやとりしをかくのこと人すまて年へぬるおほきなる所はよからぬ物かならすかよひすみておもきひやうさのためあしき事ともと思給へしもしるくとてかのみつけたりしことゝもをかたりきこえ給けにいとめつらかなることかなとてちかくさふらふ人〻みなねいりたるをおそろしくおほされておとろかさせ給大将のかたらひ給さい将の君しもこのことをきゝけりおとろかさせ給人〻はなにともきかす僧都おちさせ給へる御けしきを心もなきことけいしてけりと思てくはしくもその程のことをはいひさしつその女人このたひまかりいて侍つるたよりにをのに侍つるあまともあひとひ侍らんとてまかりよりたりしになく

〻出家の心さしふかきよしねん比にかたらひ侍しかはかしらおろし侍にきなにかしかいもうと故ゐもんのかみのめに侍しあまなんうせにし女このかはりにと思よろこひ侍てすいふんにいたはりかしつき侍けるをかくなりたれはうらみ侍なりけにそかたちはいとうるはしくけうらにてをこなひやつれんもいとおしけになむ侍しなに人にか侍けんとものよくいふそうつにてかたりつゝけ申給へはいかてさる所によき人をしもとりもていきけんさりとも今はしられぬらむなとこのさい相の君そとふしらすさもやかたらひ給らんまことにやむことなき人ならはなにかかくれも侍らしをやゐ中人のむすめもさるさましたるこそは侍らめりうの中より仏むまれ給はすはこそ侍らめたゝ人にてはいとつみかろきさまの人になん侍けるなときこえ給そのころかのわたりにきえうせにけむ人をおほしいつこのおまへなる人もあねの君のつたへにあやしくてうせたる人とはきゝをきたれはそれにやあらんとは思けれとさためなきこと也そうつもかゝる人世にある物ともしられしとよくもあらぬかたきたちたる人もあるやうにおもむけてかくししのひ侍をことのさまのあやしけれはけいし侍なりとなまかくすけしきなれは人にもかたらす宮はそれにもこそあれ大将にきかせはやと此人にその給はすれといつかたにもかくすへきことをさためてさならむともしらすなからはつかしけなる人にうちいての給はせむもつゝましくおほしてやみにけりひめ宮をこたりはてさせ給てそうつものほりぬかしこにより給へれはいみしううらみて中　〻かゝる御ありさまにてつみもえぬへきことをの給もあはせすなりにけることをなむいとあやしきなとの給へとかひもなし今はたゝ御をこなひをし給へおいたるわかきさためなきよなりはかなき物におほしとりたるもことはりなる御身をやとの給にもいとはつかしうなむおほえける御ほうふくあたらしくし給へとてあやうす物きぬなといふ物たてまつりをき給なにかしか侍らんかき

りはつかうまつりなんなにかおほしわつらふへきつねの世においいてゝせけんのゑいくわにねかひまつはるゝかきりなん所せくすてかたくわれも人もおほすへかめることなめるかゝる林の中にをこなひつとめ給はん身はなにことかはうらめしくもはつかしくもおほすへきこのあらん命は葉のうすきかことしといひしらせて松門に暁いたりて月徘徊すとほうしなれといとよし　くしくはつかしけなるさまにての給ことゝもを思やうにもいひきかせ給かなときゝゐたりけふはひねもすにふく風の音もいと心ほそきにおはしたる人もあはれ山ふしはかゝる日にそねはなかるなるかしといふをきゝて我も今は山ふしそかしことはりにとまらぬ涙なりけりと思つゝはしのかたに立いてゝみれははるかなる軒はよりかりきぬすかた色〻に立ましりてみゆ山へのほる人なりとてもこなたのみちにはかよふ人もいとたまさかなりくろたにとかいふ方よりありくほうしのあとのみまれ　くはみゆるを例のすかたみつけたるはあひなくめつらしきにこのうらみわひし中将なりけりかひなきこともいはむとて物したりけるを紅葉のいとおもしろくほかのくれなゐにそめましたる色〻なれはいりくるよりそ物あはれなりけるこゝにいと心ちよけなる人をみつけたらはあやしくそおほゆへきなと思ていとまありてつれ　くなる心ちし侍にもみちもいかにと思給へてなむ猶立かへりてたひねもしつへきこのもとにこそとてみいたし給へりあま君例の涙もろにて

木枯の吹にし山のふもとには立かくすへきかけたにそなきとの給へは

待人もあらしとおもふ山里の梢をみつゝ猶そ過うきいふかひなき人の御ことをなをつきせすの給てさまかはり給へらんさまをいさゝかみせよと少将のあまにの給それをたにちきりししるしにせよとせめ給へはいりてみるにことさら人にもみせまほしきさましてそおはするうすきにひ色のあやなかにはくわんさうなとすみたるいろをきていとさゝやかにやうたひおかしくいまめきたるかたちにかみはいつへのあふきをひろけたるやうにこちたきするゑつき也こまかにうつくしきおもやうのけさうをいみしくしたらむやうにあかくにほひたりをこなひなとをしたまふも猶すゝはちかききちやうにうちかけて経に心をいれてよみ給へるさまゑにもかゝまほしうちみることに涙のとめかたき心ちするをまいて心かけ給はんおとこはいかにみたてまつり給はんと思てさるへきおりにや有けむさうしのかけかねのもとにあきたるあなをゝしへてまきるへき木丁なとおしやりたりいとかくは思はすこそ有しかいみしく思さまなりける人をと我したらむあやまちのやうにおしくゝやしうかなしけれはつゝみもあへす物くるはしき

まてけはひもきこえぬへけれはのきぬかはかりのさましたる人をうしなひてたつねぬ人ありけんや又その人かの人のむすめなん行ゑもしらすかくれにたるもしは物えんししして世をそむきにけるなとをのつからかくれなかるへきをなとあやしう返〻思あまなりともかゝるさましたらむ人はうたてもおほえしなと中

くみ所まさりて心くるしかるへきをしのひたるさまに猶かたらひとりてんと思へはまめやかにかたらふよのつねのさまにはおほしはゝかることも有けんをかゝるさまになり給にたるなん心やすうきこえつへく侍さやうにをしへきこえ給へきし方のわすれかたくてかやうにまいりくるに又今ひとつ心さしをそへてこそなとの給いと行するゑこゝろほそくうしろめたき有さまに侍にまめやかなるさまにおほし忘れすとはせ給はんいとうれしうこそ思給へをかめ侍らさらむ後なんあはれに思給へらるへきとてなき給にこのあま君もはなれぬ人なるへしたれならむと心えかたし行するゑの御うしろみはいのちもしりかたくたのもしけなき身なれとさきこえそめ侍なれはさらにかはり侍へらし尋きこえ給へき人はまことにものし給はぬかさやうのことのおほつかなきになんはゝかるへきことには侍らねとなをへたてある心ちし侍へきとの給へは人にしらるへきさまにて世にへたまはゝさもや尋いつる人も侍らん今はかゝる方に思きりつる有さまになん心のおもむけもさのみみえ侍つるをなとかたらひ給こなたにもせうそこし給へり

大かたの世をそむきける君なれといとふによよせて身こそつらけれねん比にふかくきこえ給ことなといひつたふはらからとおほしなせはかなき世の物かたりなともきこえてなくさめむなといひつゝく心ふかからむ御物かたりなときゝわくへくもあらぬこそ口おしけれといらへてこのいとふにつけたるいらへはし給はす思よらすあさましきこともありし身なれはいとうとましすへてくちきなとのやうにて人にみすてられてやみなむともてなし給されは月ころたゆみなくむすほゝれ物をのみおほしたりしもこのほいの事し給てよりのちすこしはれ

くしうなりてあま君とはかなくたはふれもしかはし五うちなとしてそあかしくらし給をこなひもいとよくして法華経はさら也ことほうもんなともいとおほくよみ給雪深くふりつみ人めたえたる比そけに思やるかたなかりける年もかへりぬ春のしるしもみえすこほりわたれる水の音せぬさへ心ほそくて君にそまとふとの給し人はこゝろうしと思はてにたれと猶そのおりなとのことはわすれす

かきくらす野山の雪をなかめてもふりにしことそけふもかなしきなと例のなくさめの手習をゝこなひのひまにはし給われ世になくて年へたゝりぬるを思

いつる人もあらむかしなと思出る時もおほかりわかなをおろそかなるこにいれて人のもてきたりけるをあま君みて

山里の雪まのわかなつみはやし猶おいさきのたのまるゝかなとてこなたにたてまつれ給へりけれは

雪ふかき野へのわかなも今よりは君かためにそ年もつむへきとあるをさそおほすらんとあはれなるにもみるかひ有へき御さまと思はましかはとまめやかにうちない給ねやのつま近きこうはいの色も香もかはらぬを春や昔のとこと花よりもこれに心よせのあるはあかさりしにほひのしみにけるにやこやにあかたてまつらせ給けらうのあまのすこしわかきかあるめしいてゝ花おらすれはかことかましくちるにいとゝにほひくれは

袖ふれし人こそみえね花の香のそれかとにほふ春の明ほのおほあま君のむまこのきのかみなりけるこの比のほりてきたり卅はかりにてかたちきよけにほこりかなるさましたりなにことかこそおとゝしなと問にほけくしきさまなれはこなたにきていとこよなくこそひかみ給にけれあはれにもはへるかなのこりなき御さまをみたてまつることかたくてとをき程に年月をすくし侍よおやたち物し給はて後はひと所をこそ御かはりに思きこえ侍つれひたちの北の方はをとつれきこえ給やといふはいもうとなるへし年月にそへてはつれくにあはれなることのみまさりてなむひたちはひさしうをとつれきこえ給はさめりえ待つけ給ましきさまになむみえ給との給にわかおやの名とあひなくみゝとまれるに又いふやうまかりのほりて日比になり侍ぬるをおほやけことのいとしけくむつかしうのみ侍にかゝつらひてなんきのふもさふらはんと思給へしを右大将殿の宇治におはせし御ともにつかうまつりて故八の宮のすみ給し所におはして日くらし給しこみやの御むすめにかよひ給しをまつひと所は一とせうせ給にきその御おとうと又忍てすへたてまつり給へりけるをこその春又うせ給にけれはその御はてのわさせさせ給はんことかの寺のりしになんさるへきことの給はせてなにかしもかの女のさうそく一くたりてうし侍へきをせさせ給てんやをらすへき物はいそきせさせ侍なんといふを聞にいかてかあはれならさらむ人やあやしとみむとつゝましうておくにむかひてゐ給へりあま君かの聖のみこの御むすめはふたりときゝしを兵部卿宮の北の方はいつれそとの給へはこの大将殿の御のちのはおとりはらなるへしこと　くしうもゝてなし給はさりけるをいみしうかなしひ給ふなりはしめのはたいみしかりきほと　く出家もし給つへかりきかしなとかたるかのわたりのしたしき人なりけりとみるにもさすかおそろしあやしくや

うの物とかしこにてしもうせ給けることきのふもいとふひんに侍しかな河ちかき所にて水をのそき給ていみしうなき給きうへにのほり給てはしらにかきつけ給し

みし人は影もとまらぬ水の上に落そふ涙いとゝせきあへすとなむ侍しことにあらはしての給ことはすくなけれとたゝ気色にはいとあはれなる御さまになんみえ給し女はいみしくめてたてまつりぬへくなんはかく侍し時よりいうにおはしますとみたてまつりしみにしかは世中の一の所もなにとも思侍らすたゝこの殿をたのみきこえてなんすくし侍ぬるとかたるにことにふかき心もなけなるかやうの人たに御有さまはみしりにけりと思あま君ひかる君ときこえけん故院の御有さまにはならひ給はしとおほゆるをたゝ今の世にこの御そうそめてられ給なる右の大殿とゝの給へはそれはかたちもいとうるはしうけうらにすうとくにてきはことなるさまそし給へる兵部卿宮そいといみしうおはするや女にてなれつかうまつらはやとなんおほえ侍なとをしへたらんやうにいひつゝくあはれにもおかしくも聞に身の上もこの世のことゝもおほえすとゝこほることなくかたりをきて出ぬ忘給はぬにこそはとあはれに思にもいとゝはゝ君の御心のうちをしはからるれと中　くいふかひなきさまをみえきこえたてまつらむは猶つゝましくそ有けるかの人のいひつけし事ともをそめいそくをみるにつけてもあやしうめつらかなる心ちすれとかけてもいひいてられすたちぬいなとするをこれ御らんしいれよ物をいとうつくしうひねらせ給へはとてこうちきのひとへたてまつるをうたておほゆれは心ちあしとて手もふれすふし給へりあまきみいそくことをうちすてゝいかゝおほさるゝなと思みたれ給紅に桜のをり物のうちきかさねておまへにはかゝるをこそたてまつらすへけれあさましきすみそめなりやといふ人あり

あま衣かはれる身にやありしよのかたみに袖をかけてしのはんとかきていとおしくなくもなりなん後に物のかくれなき世なりけれはきゝあはせなとしてうとましきまてにかくしけるなとや思はんなとさま　く思つゝ過にし方のことはたえて忘れ侍にしをかやうなることをおほしいそくにつけてこそほのかにあはれなれとおほとかにの給さりともおほしいつることはおほからんをつきせすへたて給こそ心うけれ身にはかゝるよのつねの色あひなとひさしく忘れにけれはなを　くしく侍につけても昔の人あらましかはなと思出侍るしかあつかひきこえ給けん人よにおはすらんやかてなくなしてみ侍したに猶いつこにあらむそことたに尋きかまほしくおほえ侍を行ゑしらて思ひきこえ給人ゝ侍らむかしと

の給へはみし程まてはひとりは物し給きこの月比うせやし給ぬらんとて涙のおつるをまきらはして中　く思出るにつけてうたて侍れはこそえきこえ出ねへたてはなにことにかのこし侍らむとことすくなにの給なしつ大将はこのはてのわさなとせさせ給てはかなくてやみぬるかなとあはれにおほすかのひたちのことはかうふりしたりしはくら人になしてわか御つかさのそうになしなといたはり給けりわらはなるか中にきよけなるをはちかくつかひならさむとそおほしたりける雨なとふりてしめやかなる夜きさひの宮にまいり給へり御まへのとやかなる日にて御物かたりなときこえ給つゐてにあやしき山里に年ころまかりかよひみ給へしを人のそしり侍しもさるへきにこそはあらめたれも心のよる方のことはさなむあると思給へなしつゝ猶時〻みたまへしを所のさかにやと心うく思給へなりにし後は道もはるけき心ちし侍てひさしう物し侍らぬをさいつ比物のたよりにまかりてはかなきよの有さまとり重て思給へしにことさら道心おこすへくつくりをきたりける聖の棲となんおほえ侍しとけいし給にかのことおほしいてゝいと　くおしけれはそこにはおそろしき物やすむらんいかようにてか彼人はなくなりにしととはせ給ふをなをつゝきをおほしよる方と思てさも侍らんさやうの人はなれたる所はよからぬ物なんかならすすみつき侍をうせ侍にしさまもなんいとあやしく侍るとてくはしくはきこえ給はす猶かくしのふるすちをきゝあらはしけりと思給はんかいとおしくおほされ宮の物をのみおほしてその比はやまゐになり給しをおほしあはするにもさすかに心くるしうてかた　くにくちいれにくき人のうへとおほしとゝめつこさいしやうに忍ひて大将かの人のことをいとあはれと思ての給しにいとおしうてうちいてつへかりしかとそれにもあらさらむ物ゆへとつゝましうてなん君そこと　くきゝあはせけるかたはならむことはとりかくしてさることなんありけると大方の物語のついてにそうつのいひしことをかたれとの給はすおまへにたにつゝませ給はむことをましてこと人はいかてかときこえさすれとさま　くなることにこそ又まろはいとおしきことそあるやとのたまはするも心えておかしとみたてまつる立よりてものかたりなとし給ふつゐてにいひいてたりめつらかにあやしといかてかおとろかれ給はさらむ宮のとはせ給いしもかゝることをほのおほしよりてなりけりなとかのたまはせはつましきとつらけれとわれも又はしめよりありしさまのことききこえそめさりしかはきゝて後も猶おこかましき心ちして人にすへてもらさぬを中
　く外にはきこゆることもあらむかしうつゝの人〻の中に忍ることたにかくれあるよの中かはなと思いりて此人にもさなむありしなとあかし給はんことは猶

くちをもき心ちして猶あやしと思し人のことにゝても有ける人のありさまかなさて其人は猶あらんやとの給へはかのそうつの山よりいてし日なむあまになしつるいみしうわつらいし程にもみる人おしみてせさせさりしをさうしみのほいふかきよしをいひてなりぬるとこそ侍なりしかといふ所もかはらすそのころの有さまと思あはするにたかふふしなけれはまことにそれと尋いてたらんいとあさましき心ちもすへきかないかてかはたしかにきくへきおりたちて尋ありかんもかたくなしなとや人いひなさん又彼宮もきゝつけ給へらんにはかならすおほしいてて思いりにけん道もさまたけ給てんかしさてさなの給いそなときこえをき給けれはやわれにはさることなんきゝしとさるめつらしきことをきこしめしなからの給はせぬにやありけん宮もかゝつらひ給ふにてはいみしうあはれと思なからもさらにやかてうせにし物と思なしてをやみなんうつし人になりて末の世にはきなるいつみのほとりはかりをゝのつからかたらひよる風のまきれもありなん我ものにとり返しみんの心ち又つかはしなと思みたれて猶のたまはすやあらんとおほゆれと御けしきのゆかしけれは大宮にさるへきつゐてつくりいたしてそけいし給あさましうてうしなひ侍ぬと思給へし人よにおちあふれてあるやうに人のまねひ侍しかないかてかさることは侍らんとおもひ給れと心とおとろ　くしうもてはなるゝことは侍らすやと思わたり侍人のありさまにはへれは人のかたり侍へしやうにてはさるやうもや侍らむとにつかはしく思給へらるゝとて今すこしきこえいて給宮の御ことをいとはつかしけにさすかにうらみたるさまにはいひなし給はてかのことまたさなんときゝつけ給へらはかたくなにすき　くしうもおほされぬへし更にさてありけりともしらすかほにてすくし侍なんとけいし給へはそうつのかたりしにいとものおそろしかりしよのことにて耳もとゝめさりしことにこそ宮はいかてかきゝ給はむきこえん方なかりける御心のほとかなときけはましてきゝつけ給はんこそいとくるしかるへけれかゝるすちにつけていとかろくうき物にのみ世にしられ給ぬめれは心うくなとの給はすいとをもき御心なれはかならすしもうちとけよかたりにても人の忍てけいしけんことをもらさせ給はしなとおほすゝむらん山里はいつこにかはあらむいかにしてさまあしからす尋よらむ僧都にあひてこそはたしかなる有さまもきゝあはせなとしてともかくもとふへかめれなとたゝ此事をおきふしおほす月ことの八日はかならすたうときわさせさせ給へはやくし仏によせたてまつるにもてなし給つるたよりに中たうに時　くまいり給けりそれよりやかて横川におはせんとおほしてかのせうとのわらはなるゐておはすその人ゝにはとみにしらせし有さ

まにそしたかはんとおほせとうちみむ夢の心ちにもあはれをもくはへむとにや

ありけんさすかにその人とはみつけなからあやしきさまにかたちことなる人の

なかにてうきことをきゝつけたらんこそいみしかるへけれとよろつにみちすか

らおほしみたれけるにや